

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 11 日現在

機関番号：13102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370017

研究課題名(和文) 意味のデフレーションナリー理論の研究 ウィトゲンシュタイン意味論の理論化の試み

研究課題名(英文) Study on the deflationary theory of meaning &#8211; attempt to theorize Wittgensteinian semantics

研究代表者

重田 謙 (Shigeta, Ken)

長岡技術科学大学・工学研究科・特任准教授

研究者番号：30452402

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、後期ウィトゲンシュタイン(Ludwig Wittgenstein)の洞察の核心を抽出して独自に意味についての理論(「意味のデフレーションナリー理論DMLW」)を構成し、DMLWについて次のような研究をおこないました。

初期・中期のLW自身の見解を含めてDMLWに対立する最も有力な意味についての理論の観点からDMLWの妥当性と整合性を詳細に検証しそれによって理論的な精緻化を進めた。現代の意味論における重要な論争をもたらすいくつかの問題についてDMLWの観点からそれらをどのように解明できるかを考察しそれによってDMLWを現代の意味の諸理論に位置づけそれらとの論理的な関係を解明した。

研究成果の概要(英文)：Abstracting the essence of later Wittgenstein's (Ludwig Wittgenstein 1889-1951) insight about meaning of language, I have proposed an original theory of meaning, which I called 'deflationary theory about meaning' (DMLW). In this research I have carried out examination on DMLW in the following way.

1. From the view point of most potent theories of meaning including earlier LW's own view that are thought to be sharply opposed to it, I examine the validity and consistency of DMLW and attempt to refine it as a theory. 2. By considering how DMLW can treat problematic issues that a few significant disputes in contemporary semantics bring about, I have attempted to locate DMLW properly within the contemporary semantics and explicate the logical relation between them.

研究分野：言語, 分析哲学

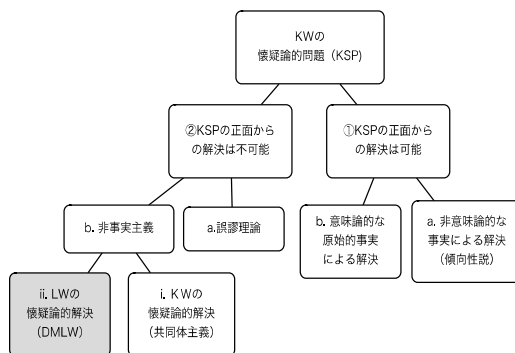
キーワード：意味論 ウィトゲンシュタイン 意味論的な懐疑 指標詞「私」 デフレーションニズム/インフレーションニズム 独我論 クリプキ

1. 研究開始当初の背景

後期ウィトゲンシュタイン（以下 LW）は言語の意味（意味論）と世界の存在（存在論）について最も徹底的で説得的な議論を提示しているが、現代の言語・分析哲学においては LW 哲学の強い影響下にある研究者でさえ LW の洞察の核心を正確に把握、消化したうえで各自の理論を展開しているとは言い難い、そうした問題意識のもとでは、後期 LW の意味論と存在論の核心を「意味のデフレーションナリー理論（Deflationary theory of meaning，以下 DM_{LW} ）と名づけその理論的な可能性を探究し、それを独自に展開してきた（「ウィトゲンシュタイン哲学に基づく意味のデフレーションナリー理論の研究」2011- 14 年、基盤（C））。

S. クリプキが解釈する LW（Kripke's Wittgenstein: KW）が提示する意味についての懐疑論的問題（KW's Skeptical Problem: KSP）（Kripke 1982）を基準にすると、 DM_{LW} と他の意味についての理論との関係を次のように整理できる。

[図 1]



これまでの研究によれば KSP を直接論ずる論者もそうでない論者も含めてほとんどの意味についての理論は（KSP の正面からの解決は可能）に分類できる。他方で（KSP の正面からの解決は不可能）に属するのは、KW の共同体主義的な懐疑論的解決あるいは意味という観念を誤謬として排除することを認める誤謬理論あるいは消去主義に同調する少数の論者だけである。 DM_{LW} は に属しながらそれらのいずれとも異なる理論を提唱している。

また先行する研究成果に基づいて DM_{LW} の理論的枠組（基底）を 1 つのテーゼと 4 つの帰結によって定式化した。 DM_{LW} の基底は本研究を通じて改良されることになるが、その詳細は研究成果で詳述する。

2. 研究の目的

これまで DM_{LW} が後期 LW の意味をめぐる考察と整合的であること、LW 解釈とは独立にそれ自身が意味の理論として妥当であることを複数の観点から正当化することを試

みてきた。その先行研究で得られた成果を基礎として、本研究では次の三つの目的を通じて DM_{LW} の理論化をさらに具体的かつ正確に展開することを目指した。

[研究目的 1] DM_{LW} とデイヴィドソンの真理条件意味論との関係を探究する

[研究目的 2] 指標詞「私」の論理と DM_{LW} の関係を探究する

[研究目的 3] DM_{LW} においてア・プリオリな認識とア・ポステリオリな認識がどのように区別できるのかを探究する

[目的 1] [目的 3] は、主にその論点をめぐる現代の意味論の研究にもとづいて、[目的 2] は主に LW による指標詞「私」についての考察の系譜の研究にもとづいて LW 哲学に内在的な観点から DM_{LW} の理論的な妥当性と可能性を探究することを企図している。

3. 研究の方法

本研究では [目的 2] から着手し、そこで得られた知見と成果に基づいてそれに適合する仕方での研究方法を修正しながら [目的 1] [目的 3] の研究を進めた。

[目的 2 の研究方法] (指標詞「私」の成立根拠の探究)

前期から後期へかけて LW は本研究の観点にとって三つの重要な理論的な転回を示している。

実在論的な意味論	非実在論的な意味論
私的言語（独我論）の肯定	私的言語（独我論）の否定
指標詞「私」の排除	指標詞「私」の許容

これまでの研究を通じてこれらの三つの転回について、（ ） という関係が成立すること、また LW 自身による指標詞「私」についての考察の変遷がこの論理的関係の探究に重要な基礎を与えてくれるという展望を得た。この観点から [目的 2] を次の段階に区分して研究を進めた。

【step1】世界の限界としての「私」と真理条件意味論の時期：特に『論理哲学論考』（*Tractatus logico-philosophicus*: TLP）における指標詞「私」の消去とこの時期の真理条件意味論および私的言語の擁護との関係を詳細に考察する。

【step2】無主体用法としての「私」と検証主義の意味論の時期：LW が一人称感覚言明の特殊性と検証主義的意味論との関係をどの

ように考えていたか、またこの時期の LW の見解とラッセルの独我論擁護 (“The philosophy of logical atomism,” 1918 など)との関係を考察する。

【step3】「私」の主体用法と客体用法と中期のゲーム・規則論の時期：後期と中期の意味論の相違、私的言語批判との関係を考察する。

[目的1の研究方法] (DM_{LW}と真理条件意味論との関係の探究)

当初は、DM_{LW}と対立するデイヴィドソンの真理条件に基づく意味論との関係を研究し、それによってDM_{LW}の妥当性を批判的に検討し、現代意味論におけるDM_{LW}位置づけを探究する予定であった。しかし[目的2]の研究を進める過程で[目的1]の追究には真理条件に基づく意味論として前期LWの『論考』(TLP)の議論をDM_{LW}の観点から詳細に再考察し、その研究成果を基礎にしてデイヴィドソンの意味論を研究するほうが効果と効率が高いと判断し、考察対象を置換して研究を進めた。

[目的3の研究方法] (ア・プリオリ-ア・ポステリオリの区別についての探究)

DM_{LW}は形而上学的な存在としての意味を否定する([図I])。したがってその存在を肯定する他の意味論([図I])とは異なり、ア・プリオリな認識とア・ポステリオリな認識の区別において固有の問題に直面すると考えられる。また判断における分析性-総合性、認識におけるア・プリオリ-ア・ポステリオリ、様相における必然性-偶然性という密接に関連する3つの対概念は現代の意味論において重要な論点を供給している。とりわけ後二者を峻別したクリプキの『名指しと必然性』(Kripke 1972)以来、意味論においては2次元的な意味論が多く論者(R. Stalnaker, M. Davies, L. Humberstone, D. Chalmers, F. Jackson, S. Soames, etc.)に提唱され、またそれと並行して指示理論においてはフレイゲ流の記述主義とミル流の直接指示理論との対立がもたらす論点が深化している。

現代意味論におけるこれらの論点について、とりわけKWおよびそれとは根本的に対立するクリプキ自身の見解(1972 etc.)との差異を詳細に考究することを通じて間接的にDM_{LW}の理論的な妥当性と現代意味論におけるその位置づけを探究した。

4. 研究成果

(1) 指標詞「私」の意義

主に[研究目的2]を探究した結果、指標詞「私」を導入することがDM_{LW}が成立するための超越論的な条件の1つであることを確

証できた。(指標詞「私」とは、本研究ではおおまかには、他の単称名辞(固有名、確定記述、指示詞、量化を用いた指示表現など)に還元不可能であるという特質をもった1人称代名詞として定義される。)また前期LWと後期LW(DM_{LW})の言語哲学に関する論理的な切断を画するのはその意味論の転回とならんで指標詞「私」の排除から導入への転換に存していることを高い蓋然性で確証できた。(Shigeta, 2015, Shigeta forthcoming “Deflationary Semantic Realism in Early ‘Middle’ Wittgenstein”)

(2) DM_{LW}と後期LWの意味論の整合性

意味論に関するKWと後期LWとの複雑に入り組んだ関係を精確に解明するとともに、それによってDM_{LW}とLWが少なくとも論理的には整合的であること、また両者が乖離することになる契機的一端を確証できた。(Shigeta, 2014)

(3) DM_{LW}の基底の改良

3つの研究目的を探究した結果、次のように改良されたDM_{LW}の基底を確立できた。

[意味の実在論と非実在論を分類する基準]([意味論の分類基準])

1. ある状況Wと文脈Cにおいて、適格なwell-formed文Sの構成要素となることができる任意の記号sを主体aが(現実に)使用(適用)したとき、aが理解する有意義な命題pの構成要素としてのsの意義に関して、それが主体aによって把握され、それに基づいて記号sの適用がなされたならば、その適用が(任意の未来の時点においてその誤りが判明する可能性が存在しないという意味において)不可謬であることを保証するなんらかのことがらがあるような仕方であれ存在していること。

2. 1のことがらをaが認識可能であること。

この2つの条件を満足する意味論は「意味の実在論」に、2つの条件の少なくともいれずれか1つを満足しない意味論は「意味の非実在論」に分類される。

[DM_{LW}の基底]

[テーゼ1] DM_{LW}は[意味論の分類基準]にしたがって意味の非実在論に分類される。

[テーゼ2] 「デフレーション的な」意味の規定：DM_{LW}は、[意味論の分類基準]における意味にすることがらの存在あるいはその認識可能性を否定するが、[意味論

の分類基準]が要求する条件を満足しないそれ以外の意味に関するものがらの存在あるいはその認識可能性を否定しない。したがってその限りにおいて意味という概念が有意義であることは肯定する。

[テーゼ3]可謬性のテーゼ：現在に至るまでになされた任意の語の任意の適用について、その意味に関してその語の適用が不可謬な仕方である(正しい)ことをア・プリアリには論証できない。(テーゼ1の帰結)

[テーゼ4] DM_{LW} 意味の成立条件：任意の主体がなんらかの記号を使用しその記号の意味を理解する ↔ 意味は成立する

[テーゼ4']改訂された DM_{LW} 意味の成立条件：私なんらかの記号を使用しその記号の意味を理解する ↔ 意味は成立する

[テーゼ4'の補足条件]: 意味の成立条件は記述不可能である。その条件に含まれる「私」は「任意の私」であってはならないが、その条件を満足する仕方「私」を記述できないからである。

[テーゼ5]私的言語の不可能性：私を含む任意の主体が任意の記号について理解する意味はすべて他の主体がそれを理解する可能性が原理的に存在する。(ただし[テーゼ5]は次を前提する。)

[テーゼ5の前提] 任意の存在者は、もしその者が意味を理解するならば、その者が自由に動かすことができる身体として時空間内に位置づけられ、かつそのように位置づけられていることを認識している(指標詞「私」を使用できる)のでなければならない。

[テーゼ5の系] 意味の实在論を前提するとき『哲学探究』(Philosophische Untersuchungen: PU)における私的言語論 private language argument (PLA)単独では私的言語の不可能性(テーゼ5)を論証できない。

[テーゼ5の系] 意味の非实在論(PUの意味論)と(LWが明示的にはその論拠を提示してはいない)テーゼ5の前提だけから私的言語の不可能性(テーゼ5)が帰結する

それぞれの項目における具体的な改良内容

は次の通りである。

「意味の分類基準」について；当初はこの分類基準としてKWの懐疑論的問題に対して「正面からの解決」を与えることができるかどうかを採用していた。しかしその基準は DM_{LW} を規定するという目的にとって曖昧な点を含んでおり、KWを直接論じない論者の立場を分類するのに適しておらず、またKWがLWの意味論について懐疑論的な側面を過度に強調したため特にKWとLWの議論に精通していない研究者をミスリードする傾向がある、といった問題を抱えていた。それらの問題の解消するためにこの基準を導入した。

[テーゼ1]について；この基準にしたがってTLPおよび哲学に復帰した後1930年頃までのLW(*Philosophical Bemerkungen, Wittgenstein and the Vienna Circle*)は意味の实在論に分類されることを検証した(Shigeta forthcoming)。これによって意味論について前期LWと DM_{LW} との差異を詳細に解明するとともに、意味の实在論に分類できる他の諸意味論を研究する基盤とした。

[テーゼ2]について；本研究では、上記の基準によって意味の实在論に分類される意味論を「インフレーション的な」意味論、意味の非实在論に分類される意味論を「デフレーション的な」意味論と呼ぶ。 DM_{LW} は[意味論の分類基準]の2つの基準を満足することは論理的に不可能であるとみなす。したがって DM_{LW} の観点では、可能な意味論があるとすればデフレーション的な意味論だけである。

[意味論の分類基準]を満足することが不可能であることを認め、それ以外に意味の基準を認めない立場は誤謬理論あるいはそれに類する消去主義の立場である(W. V. O. Quine, etc)。その立場は DM_{LW} を含めてデフレーション的な意味論の可能性を許容しない。

「インフレーション」「デフレーション」という用語にはKWによるLW意味論の懐疑論的特色づけを回避する意図がある。

[テーゼ3]について；これは、意味の非实在論、したがって[意味論の分類基準]のいずれかの条件が満足できないことを認めるならばそこから帰結するテーゼにすぎない。なぜならある語の適用が確実に真であること、したがって不可謬であることをア・プリアリに論証するには、それを保証する意味に関するものがら存在しなかつそれを認識することが必要であるが、意味の非实在論

は少なくともそのいずれかを否定するからである。

他方、[意味論の分類基準]の2つの条件を満足する意味の実在論を認めるとしても、それは必ずしもテーゼ2の否定(そのア・プリオリな論証が可能であること)を含意しない。[意味論の分類基準]が要求する意味に関することがらが存在し、それが認識可能であるとしても、その認識にはア・プリオリな仕方とア・ポストリオリな仕方がありうるからである。意味の実在論に分類可能な立場のほとんどはア・プリオリな認識可能性を主張するが、ア・ポストリオリな認識だけが可能だとみなしていると解釈のできる論者も少数存在することを明らかにできた(S. Soames 1997, 1998, P. Horwich 2012, KW と区別されるクリプキ自身)。

[テーゼ4][テーゼ4']について;テーゼ4はDM_{LW}と同じく意味の非実在論に分類されるKW,その共同体主義的な見解との本質的な相違を表明している。KWと異なりDM_{LW}は個人主義的な意味論なのである(Shigeta 2014)。

テーゼ4'とその補足条件はそれをさらに個人主義的に深化させた主張である。この見解の契機となる発想はかなり古い(重田 2007,「独在的な使用と経験的な使用」),その発想の正確な意義は本研究期間においてはじめて明らかにできた。

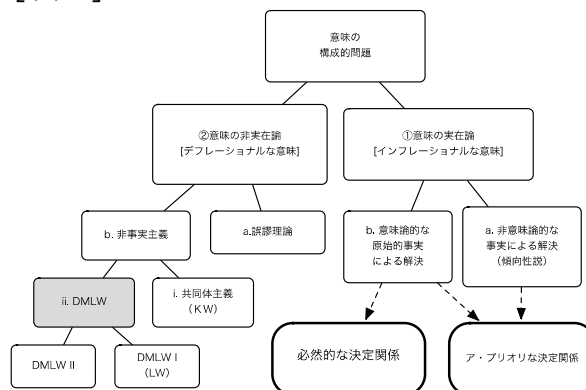
DM_{LW}をテーゼ4'とその補足条件にまで深化したとしてもそれは後期LWと整合的である。しかし現時点の私見では、DM_{LW}をテーゼ4'の方向、個人主義的な方向へと深化していくとき、それは限りなく初期LWの意味論(意味の実在論の一種)に接近していき、究極的にはDM_{LW}の自己論駁の至ると考えている。

[テーゼ5]について;TLP(および少なくとも1930年頃までの中期LW)は有意義な言語から指標詞「私」を完全に排除し、したがって[テーゼ5の前提]を否定している。またその時期のLWはそれに加えて意味の実在論を支持することで実在論と独我論の一致という特異なテーゼを擁護することを試みている(Shigeta 2015, Shigeta forthcoming)。

他方後期LWでは[テーゼ5の前提]は明示的に論証されることなく暗黙に前提されている。本研究では、「意味の非実在論」と「テーゼ5の前提」の連言によってはじめて「テーゼ5」を論証できるという仮説的な見解を導いた(重田(口頭発表)2016「意味の反実在論と私的言語批判-『哲学探究』における意味論と感覚論-」)。

(4) 意味論におけるDM_{LW}の位置づけの精緻化
本研究を通じて、現代の主要な意味論におけるDM_{LW}の位置づけをより精確にし、それによってDM_{LW}の特質と他の理論との論理的な関係をより明確に把握できた。具体的な成果は下記の通りである。

[図II]



第1に分類に使用される基本的語彙が修正され,[図II]では特に「懐疑論的」という語彙が抹消されている。これはたんなる用語上の修正ではなく、内容の修正をともなっている。KWの懐疑論的問題は意味が成立するために過剰な要求を課しているにすぎず、それを「正面から解決」できないことは必ずしも懐疑論的な結論をもたらすわけではない。DM_{LW}の枠組みにおいて維持される意味は、意味が成立するとすれば可能である唯一の意味であり、それはKWの懐疑論的問題が要求する条件の中で余剰部分を満足することを適切に放棄した「デフレーション」な意味なのである。他方でその余剰部分の条件まで満足すると主張する理論が擁護する「意味」は、存立することが不可能なことがらを表示する「インフレーション」な疑似概念にすぎないのである。[意味論の分類基準]が導入された1つの目的はKWの懐疑論的問題が含むその余剰な条件を明示することにある。

第2に,[図I]のb(ii)(DM_{LW})が[図II]では2つ(DM_{LWI}とDM_{LWII})に分化している。DM_{LWI}とDM_{LWII}の相違はDM_{LW}の基底テーゼ4とテーゼ4'による修正を表現している。テーゼ4の説明で述べたようにDM_{LWII}は少なくとも公式のLWからは乖離するが、論理的な整合性は保っている。

第3に,(意味の実在論)について「ア・プリオリな決定関係」と「必然的な決定関係」という分類の観点が入力されたことである。これは最も重要な改良点である。aとbはともに「意味の実在論」に属するが、この新たな分類の観点によってこれらの立場は、意味に関することがらによる任意の記号の

適用についての決定関係がア・プリアリな決定関係である場合と必然的な決定関係である場合に分類される。

前者の立場は DM_{LW} の基底テーゼ 4 (可謬性のテーゼ) を否定しある語の適用がその意味に関して不可謬な仕方である (正しい) ことをア・プリアリに論証できるとみなすのに対し、後者は基底テーゼ 4 を受容するのである。S. Soames 1998, 1997, Horwich 2012, 2010 そして KW と区別されるクリプキ自身の見解はおそらくこの立場に分類できる。現時点での私見では意味についての理論としてこれは DM_{LW} に対立する最も有力な立場である。この対立の背後には本質主義と反本質主義との対立という形而上学的な難問が存しており、これについての探究は今後の重要な研究課題となる。

この改良された基準にしたがうと意味についての諸理論は次のように分類される。

現代の意味論のほとんどは意味の構成的問題を解決可能だとみなす意味の实在論 ([図 II]) に分類される。

a に分類できる理論; 情報論的な理論 (F. Dretske 1981, 1986, J. Fodor 1987, D. W. Stampe 1977), 目的論的な理論 (D. Papineau 1987, J. Fodor 1984, Millikan 1984) 等。

b かつ「ア・プリアリな決定関係」を認める立場に分類できる理論; 意図に基づく意味論 (P. Grice, S. Schiffer), 概念役割意味論 (C. Peacocke, H. Field 1977, N. Block 1986) 等。

後期 LW 哲学の影響下にあり b かつ「ア・プリアリな決定関係」を認める立場に分類できる論者; J. McDowell 1991, 1984, P. Boghossian 1990, 1989, C. Wright 2007, 1989, 1984 等。

b かつ「必然的な決定関係」を認める立場に分類できる論者; S. Soames 1998, 1997, Horwich 2012, 2010, Kripke 1972 等

LW 解釈としては Baker & Hacker, W. Goldfarb, P. Pettit 1990, 鬼界彰夫 2007, 飯田隆 1997 などが $LW(PU)$ を b かつ「ア・プリアリな決定関係」を認める立場に分類している。

a に分類できる理論; W. V. O. Quine, 1960, 1969 など。

b(i) に分類できる理論; KW の懐疑論的解決を支持する論者。M. Kusch 2006, 黒崎宏 2002 等。

また C. Diamond 1989, R. Fogelin 1976, 永井均 1991 などは少なくとも LW を非事実主義に属するものとみなしているが、明示的には KW の懐疑論的解決を否定しないので KW の懐疑論的解決を支持する論者と

同じく DM_{LW} には分類できない。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

Ken Shigeta, “‘Solipsistic’ Realism via the Logic of *Tractatus*,” *Realism – Relativism – Constructivism, Papers of the 38th International Wittgenstein Symposium*, 査読有, vol. XX, The Austrian Ludwig Wittgenstein Society, pp.277-280, 2015.

Ken Shigeta, “Exposition of Two Forms of Semantic Skepticism: Wittgenstein’s Paradox of Rule Following and Kripke’s Semantic Paradox,” *Philosophy and Society*, 査読有, no.1, University of Belgrade, pp.127-142, 2014.

[学会発表] (計 4 件)

Ken Shigeta, “Why Is It Impossible to Follow a Rule ‘Privately’?,” *Frontiers of Philosophical Investigation in Asia Chulalongkorn University - Osaka University International Joint Conference*, Room 801/14, Mahachakri Sirinthorn Building, Faculty of Arts, 招待講演, 17 July 2016, Bangkok (Thailand).

Ken Shigeta, “‘Solipsistic’ Realism via the Logic of *Tractatus*,” 38th International Wittgenstein Symposium 10 Aug 2015, Kirchberg am Wechsel (Austria).

重田謙, 「意味の反实在論と私的言語批判 – 『哲学探究』における意味論と感覚論 –」, 日本哲学会第 75 回大会, 2015 年 5 月 14 日, 京都大学吉田キャンパス。

重田謙, 「独我論は論駁されたのか – 意味の实在論と反实在論との対立の帰趨 –」, 日本科学哲学会第 47 回大会, 2014 年 11 月 15 日, 南山大学名古屋キャンパス。

[その他]

ホームページ等

<http://shigelabo.hotcom-web.com/wordpress/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

重田 謙 (SHIGETA Ken)

長岡技術科学大学・工学研究科・特任准教授
研究者番号: 30452402